

故 石原 晃



神奈川県

1980年代のマダガスカル共和国で、多くの人が実現すると信じなかった海洋漁業開発と、冷凍海産物の流通及び販売網の構築を日本の援助によって成功させ、更に近隣国への輸出を主導した。四方を海に囲まれながら殆ど未利用だった海洋水産資源を貴重な蛋白源として国民に提供し、同時に雇用機会の創出や外貨獲得という偉業を石原さんは達成した。そして概ね20年の後、在マダガスカル日本大使館に勤務した際には、期待通り発展していた水産業の更なる成長のために「海の恋人」と呼ばれる森林の育成が、そして世界でも貴重な同国の固有種動植物の保護のためにも自然林復原が不可欠であることを痛切に感じた。

石原さんは大使館勤務の激務の中で、NPO法人アジア母子福祉協会（AMCWA）の協力を得て2008年から植林活動を開始した。2009年から同国の中央高地一帯に植えた桜は、今では毎年春になると満開の美しい花を咲かせ、同国の人々に「サクラ」が親しまれるようになった。2011年から開始したアンバトランピ市の児童養護施設への文房具、衣類、食料などの継続的支援を契機に、施設の敷地内で苗木作りや植林を行うこととなり、子どもたちに接ぎ木や植林の仕方を教えるようになった。同国の固有種動植物が共生できない外来種のユーカリとカリビヤ松を引き抜き、自ら育てた固有種樹木や桜の苗木を植林する。

植林は成果が見られるまでに長い年月と膨大な労力を必要とする地道な活動だが、同国の子どもたちの将来を見据えた活動を継続してきた。また、同国に近いモーリシャスにおいても桜の植樹を続け、沿岸漁業開発に対する技術協力を要望されていた。

（石原晃さんは日本に帰国中の2020年3月14日に急逝されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。）

（推薦者：大谷 光弘）

この度、亡き父が、公益財団法人社会貢献支援財団から「社会貢献者表彰」という名誉ある賞をいただき、家族として大変嬉しく思っております。受賞予定であった父が亡くなったにもかかわらず、予定通り受賞を決定して下さった財団関係者の方々に、厚く御礼申し上げます。父は社会貢献者表彰の受賞を楽しみにしていました。受賞式前に亡くなったことは残念ですが、当人も大変喜んでのことと思います。

父は45年前の1975年に海洋漁業開発のため、初めてマダガスカルへと渡りました。その後、様々な国や地域を仕事で訪れた父でしたが、度々マダガスカルと関わる機会があり、マダガスカルに魅了された父は、人生の最期はマダガスカルで活動することを決めていました。その後、同国の水産資源を守るためには動植物の保護が必要と考え、2008年から植林活動をはじめました。

父は植林の専門家だったわけではありません。しかし、日本国内にいる植林専門家に話を聞くなどして植林についての知識を増やしていきました。桜の植樹をメインの企画にしましたが、最初は上手くいかないこともあり、悪戦苦闘していたのを覚えています。しかし、何年も活動していくうちに、苗木作りや接ぎ木のコツに気付き、桜の植樹に成功しました。

異国の地での植林活動は、体力面で大変ですし、成果が出るまで何年も時間を要します。それでもマダガスカルや現地の人々の生活に貢献できること、また子どもたちの将来を考えて植林活動を亡くなる直前まで続けてきました。父の活動指針は、自分がお金を稼ぐためではなく、異国の地に、赤の他人が行って活動するのだから、その国が発展すること、現地の人たちの生活水準が少しでも良くなるのが第一で、貢献できることが幸せでした。その成果もあり、大使館前に桜並木を、その他の地域においても桜の植樹に成功し、桜以外の植物の育成もすることができました。

父は亡くなりましたが、一緒に活動してくれた現地の方々、父の築いた植林活動を続けてくれることを約束してくれたことを嬉しく思っています。父の活動が、今後もしも続いていくことを祈っています。

この度は、本当にありがとうございました。

石原 晃（代筆 阿部 雅玖）



▲苗木を手入れする石原さん



▲財務庁中庭に桜の植樹後、財務大臣を囲んで



▲大使館中庭の満開の桜



▲石原さんが植えた桜の実をついばむマダガスカルメジロ



▲苗床用の土を準備する石原さん



▲アンバトランビ 児童施設 クリスマスプレゼント

細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会



大阪府

代表を務める田中美紀さんは、自身のご息が生後5か月で細菌性髄膜炎に感染し、肢体・知的障がいとなったことから、その原因を調べていく中で、予防接種を受けていればこの病気にはかからなかったこと、そして欧米では既に定期摂取の対象だが、日本では承認されていないことを知った。防げる病気ならば、これ以上患者を増やしてほしくないと、小児科医ら医療従事者と共に、署名運動を行い訴え続けた結果、2008年にヒブワクチン、2010年に肺炎球菌ワクチンが発売、公費助成がなされ、2013年4月からついに定期摂取化が実現した。

しかし現在も、これらの菌以外の髄膜炎は海外では珍しくない事から、それらの予防接種への普及活動に尽力している。また、髄膜炎で子どもを亡くされた家族や後遺症を抱える方の支援を行っている。

(推薦者：佛教大学 社会福祉学部教授 武内 一)

代表

田中 美紀

細菌性髄膜炎という感染症をご存知ですか？

小児科医の間では乳幼児がかかる最も恐ろしい感染症とされています。

脳を覆う髄膜に細菌が入りこみ炎症を引き起こします、感染すると多くが重症化し、生死をさまよい、治療が遅れば死亡、助かっても4人に1人に後遺症が遺ってしまうような感染症です。

私の息子は2003年12月生まれ、元気いっぱいこの世に生を受けました。しかし、生後5か月に時、突然の発熱から“細菌性髄膜炎”と診断されました。肺炎球菌が原因でした。

聞いたこともない病名に『力は尽くしますが元通りに返せるかどうかはわかりません』という担当医の言葉でようやく我が子の深刻な状況を理解するのがやっとという有様、息子はいのちを取り留めましたが、その現実是非常に厳しく…遺るかもしれないといわれている代表的な後遺症のすべてが息子を襲いました。水頭症で脳室拡大、脳を萎縮し、てんかん、難聴、体幹機能は失われ座ることも立つことも叶いません。

そんな息子とたくさんのハンディは抱えますが『前向いて生きていいこう!!』そんな風に思えるようになった2006年のある日、偶然目にした新聞記事に“細菌性髄膜炎はワクチンで防げる”と書いてありました。しかも、先進国で承認使用されていないのは日本だけ…世界ではすでに過去の病気となりつつあると書いてありました。その一方、日本では防ぐことが出来るワクチンの存在も、細菌性髄膜炎という怖い病気があることすら私たちには届いてはいなかったのです。

世界中で当然のように使われているワクチンがあるのに、子どもたちが守られていない今の日本!!この現状は絶対おかしい!!なんとかしたい!!賛同してくださる皆様のお力を結集したい!!この気持ちが、患者家族会の発足の大きな要因となり、この日か

ら会のメンバーや賛同してくださる全国の小児科医をはじめとする様々なお立場の皆様と、ワクチンの導入と定期接種化を求めてきました。

知恵と力を振り絞り、街頭署名を行ったり、ワクチンデモ街頭宣伝メディアへの情報提供や出演などを通じて広く国民の皆様知ってもらう啓発活動を重ねてきました。

私たちの集めた署名はのべ20万筆となり！署名提出は計4回行いました。副大臣・大臣との面談やその他要望書の提出は計6回に上りました。

わたしたち当事者家族会は細菌性髄膜炎のことを、ワクチンで細菌性髄膜炎を防ぐ重要性を、これからも仲間たちとともに伝えていきます。

代表 田中 美紀



▲2007 ヒブワクチン交渉会見



▲2010 ワクチンパレード



▲2011 守る会アピール



▲2011 髄膜炎 DAY



▲2019 ワクチンパレード



▲2019 大臣要請

社会福祉法人光の園 広島マック



施設長
小玉 正平

広島県

1999年にアルコール依存から立ち直るための施設として中国四国地方で初めて設立された。現在は薬物・ギャンブル・摂食障害や複合的依存症からの回復リハビリセンターとして、グループホームや作業所を運営する。

スタッフの多くはこの施設の回復者で構成されていて、利用者は生活のリズムを取り戻しながら、毎日午前午後ミーティングを行い、回復の為にAAの12ステップの実践を回復支援の柱として、自分自身に正面から向き合い、生き方と考え方を変わって行く事を共有する。刑務所や拘置所を釈放された依存症の人が、そのまま社会に出ることは、再び犯罪に繋がる事例が多いが、このような中間施設におけるリハビリと回復者の支援によって、社会復帰を成功させることができる。

“飲まない事はスタートに過ぎない”生き方を変える事を続け、依存に戻らず社会生活に戻れることを踏まえ、365日根気強く利用者に関わり、社会からの孤立を防ぐため日々、活動している。

(推薦者：NPO 法人食べて語ろう会／カトリック広島司教区 司祭 原田 豊己)

この度は第54回社会貢献者表彰をいただき、心より感謝申し上げます。

また推薦をしていただいたNPO法人 食べて語ろう会の中本さん（ばっちゃん）、カトリック広島司教区の原田神父にお礼申し上げます。

今回、社会貢献者として表彰されるとは思いもしませんでしたので、受賞が決まったと連絡をいただいた時には「えっ！うちでいいのですか？」と聞き直しをしたほどでした。

マック（メリノール・アルコール・センター）は1974年に埼玉県大宮でアルコール依存症から抜け出すことができずに苦しんでいる人の回復の場としてメリノールレジデンスとして始まり、その後全国に広がってきました。アルコール依存症の回復プログラムをAA（アルコホーリクスアノニマス）の12ステップを基礎にミーティングや日常生活訓練、レクリエーション等を取り入れて実践しています。

広島マックは1999年に広島市南区にあるカトリック翠町教会の一部をお借りして、大阪マックでプログラムを受けて回復した仲間が施設長として始めました。その後12ステップの基本理念である「見返りを求めずに与える」こと「ひきつける魅力」をモットーとして、回復した仲間がスタッフとして次の仲間の回復の手伝いをさせてもらい、現在に至っております。

現在はマックに来る仲間も、アルコール以外に薬物、ギャンブル、摂食障害、買い物、インターネット、AC（アダルトチルドレン）、感情障害と多岐にわたっておりスタッフも精神保健福祉士などの資格取得や研修への積極的な参加をしています。行政や病院との連携も大切なことになっており、アルコール依存症回復者以外の専門職の方のスタッフへの登用も必要となっています。

利用者の仲間は、マックで規則正しい生活をする事で肉体的に回復していきます。またミーティングの中で同じ経験をした仲間の話を聞いてだんだんと心を開いていき、今まで人に言えなかった話をするようになり、正直になることを学ぶことで精神的にも回復をしていき、失敗だらけで投げやりになっていた人生を、飲まないことが仲間の中で継続できているという成功体験をして、依存症から回復できるという希望が湧いてくるのです。アルコール依存症以外のたくさんの仲間も同じプログラムでこれまで社会復帰をしています。我々スタッフも同じ経験をしていますので、仲間の事がよくわかり、仲間も我々を信用してくれます。このことがマックの強みだと思っています。スタッフ一同、今回の社会貢献者表彰に甘んずることなく、今後も仲間の立場に立った支援をしていく所存です。ありがとうございました。

施設長 小玉 正平



▲ミーティングの様子



▲食事



▲面談・相談

NPO 法人女性・人権支援センター ステップ



理事長
栗原 加代美

神奈川県

2001年、DV 被害者女性を保護するシェルターを開設。活動する中で、加害者が変わらなければ新たな被害者が出てしまう、保護するだけでは根本的な問題解決にならないと感じて、2011年に DV 加害者更生プログラムを始めた。加害者を更生するためのプログラムとして、アメリカの精神科医グラッサー博士の選択理論を用いた。更生プログラムは1年間で52回受講する。52回受講することで、約8割はDV 思考・怒りから解放され、家族関係を修復している。被害者でもあるパートナーが変化を認めている。

また、傷ついた被害者の心をどのように回復していくかを学ぶ被害者プログラムや、壊れた家庭の修復のために夫婦塾や個人やカップル、親子塾など、個別カウンセリングも行っている。年間100名を対象にプログラムを実施。現時点で約720名とその家族が更生を実感している。過去と相手は変わらない、自分の思考と行為と未来は変えられる、「加害者は変わる」ことを目指す輪を広げ、DV等の被害者と加害者、その家族が暴力のない平等で尊重される人生を送るための活動を続けている。

今回の受賞はステップにとってとても意義深い、嬉しいものとなりました。その理由はDV、虐待、ストーカー加害者更生プログラムを始めて丁度10年、シェルター開設から20年目を迎える大きな節目の年に当たるからです。そのような年にステップが行ってきた被害者支援、加害者の変化への支援が社会に貢献してきたことを認められたことが嬉しくてたまりません。帝国ホテルでの宿泊を兼ねてのご招待でしたが、授賞式の前日は嬉しさと、安倍首相夫人にお会いできる興奮から一睡もできませんでした。

眠れない真夜中に思い浮かべたことは、家族崩壊の人生のどん底から立ち上がり、新しく人生をやり直した加害者の方々の血のにじむような努力でした。

このような変化を遂げた方々の中で特に印象に残った方を紹介したいと思います。

彼は50代の男性。小学生の女の子が二人の父親。妻は40代。結婚15年目のある日、彼が仕事から帰ると妻子はいなくなり、もぬけの空状態。あわてて警察に捜索願いを出す。妻はすでに警察に相談しており、捜索願い不受理届けを提出。その時の警察の対応は悪党扱いで彼は怒りがこみ上げる。それから彼は弁護士、探偵と回るが、DV 加害者は虫けらのように扱われ、彼は妻のせいで彼等からこのような対応を受けるのだと考え、妻に殺意をいだき、同時に自殺願望を持つようになる。最後に向かったのが反社会組織。そこで妻の殺人をお願いしようとしたが、その前にステップの門をくぐることを決断。私が面談を行いました。彼は2時間泣きながら子ども時代から抱えてきた心の闇について吐き出すように語り続けました。彼の両親は毎日、包丁を持ちだし、血みどろの喧嘩を繰り返していました。母親は不倫を行い、そのストレスは彼に向かいました。彼は人を信じず、暴力で世の中を渡る習慣が身に付いていき

ました。私はあまりにも悲しい彼の子ども時代を思い、泣きながら傾聴を行いました。話終わると彼の顔に微笑みが浮かび、僕の人生で条件ぬきでこんなに共感して話を聞いていただいたのは初めてです。僕の中から妻への殺意と僕の自殺願望が無くなり、今日は僕の命日になりましたと語りました。感動に包まれたことを、6年前の出来事ですが、昨日のように思い出しました。彼は変化して、DV加害者の電話相談を行うようになりました。ステップは僕を育て直してくれた子宮のような存在だと語っています。

この賞状は参加者と私たちスタッフの共同で獲得したものだと思います。

理事長 栗原 加代美



▲30.11.5. 麻溝台高校・講演会



▲横浜市緑区役所、講演会



▲関東学院大学一講演会



▲相模原市・教職員、研修会



▲日本テレビニュースゼロ・取材

おばあちゃんのパソコン教室 このゆびとまれ



埼玉県

埼玉県新座市の公民館で20年にわたり続けられている高齢女性たちが主体のパソコン教室。市内の大学が開講するシニア向けのパソコン教室は受講希望者が多く、なかなか受講することができなかった高齢女性たちが大学教授や学生の助けを借りて2000年に開講した。「のんびり、やさしく、楽しく、行きつ戻りつ学ぶ」がモットーの教室では専門用語は殆ど使われない。最大の特徴は教わりながら、教える技術も身に付け、パソコン学習ボランティアになることを目指すところ。毎月2回、第2・4火曜日に開かれる教室では、学習してきた人が順番に講師となり、自ら用意したテキストを使って、ワープロソフトや表計算ソフトの使い方を教える。わからなければ直ぐに隣に座った人同士も教え合って、図形描画でブックカバーや年賀状のイラストを描いたり、表を作って計算式を用い、医療費計算や覚え書きを作ったりできるようになる。身に付けた技術で、市内の認知症予防グループのパソコンボランティアとして活躍する人もおり、今後の教室の更なる発展が期待される。

(推薦者：角田 真二)

顧問並びに立ち上げた者の一人、十文字学園女子大学所属

角田 真二

今回は、思いもかけない素晴らしい賞を頂戴しまして、グループ一同、喜びとともに驚いております。

私たちのグループは、1998年に十文字学園女子大学において実施されたシニアのためのコンピュータ教室が発端です。そこでコンピュータの学習を継続したいと考えた新座市民と十文字学園女子大学の教員とたった3人で2000年に立ち上げ、新座市の公民館で細々と続けてきたものです。まさか、20年以上継続できるとは夢にも思っていませんでした。「のんびり、やさしく、楽しく、行きつ戻りつ学ぶ」をスローガンに継続してきました。

開始当時は、コンピュータの学習と認知症予防が結びつくとは考えもしませんでした。もちろん、高齢者自身が別の公民館へ出向いてコンピュータを教えるといったことも考えもしませんでした。私たちの継続している活動は、日常生活の一部であり、火曜日の午前中になると当たり前のように徒歩で、自転車に乗って公民館へ行く。1年のなかで、4月から3月までの活動がルーチン化されています。4月になると新しい会員が入り、コンピュータの電源を探す学習から開始する。3月には総まとめをして、来年は自分が教える講師の立場に立つのかなと考える。既に生活の一部であり、受賞に値するようすごいことをしているといった気持ちはございません。自分たちの生活の一部であり、それを楽しんでいるとうことです。

20年の間にメンバーは入れ替わりもありましたが、変わらず20年継続しているメンバーもいます。毎年4月、コンピュータの電源を探すところから開始します。ベテランのメンバーが隣に座り、丁寧に丁寧に教えます。そして、何年かすると教える立場に立つというわけです。自分たちでは取り立てて優れたことをしているという実感は



ないのです。ただ一つ大切にしてきたことはスローガン「のんびり、やさしく、楽しく、行きつ戻りつ学ぶ」だけです。それは20年変わりません。現在は、コロナのために活動は休止状態ですが、状況を見ながら活動を今後どのように展開するか、集まれないながらもコミュニケーションはとっています。

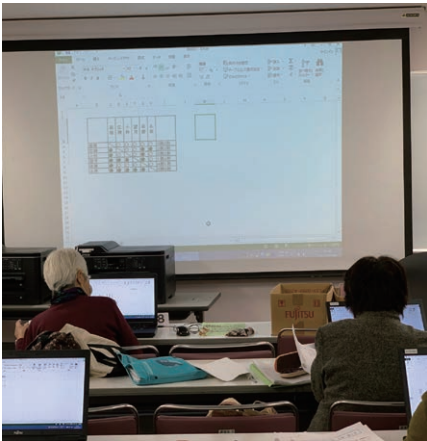
活動を継続してこれたのは、新座市、公民館、十文字学園女子大学等のさまざまな支援があったことはもちろんのことです。お礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

最後になりますが、貴財団に対してお礼を申し上げるとともに、貴財団のご発展をお祈りしております。

顧問並びに立ち上げた者の一人 角田 真二 つのだ しんじ



▲わからなければすぐに確認し合います



▲本日の課題



▲互いに操作を教え合います

認定 NPO 法人レット症候群支援機構



代表理事
谷岡 哲次

大阪府

罹患者の殆どが女児で、1歳前後から発育に障がいが見れる難治性疾患「レット症候群」の啓発活動を2011年から行っている。同病は診断がつくまでに時間がかかるうえ、根本的な治療法がなく対処療法しかない。患者側から行動し、この病気のことを知ってもらおうと、家族や関係者と情報交換や啓発活動を行うとともに、研究者らと共に患者の詳細な症状や成長過程をまとめたデータベースの構築に取り組み、今後の研究の発展につながる活動も行っている。また治療薬の開発につながるよう、研究費の支援も行っている。

(推薦者：一般社団法人和歌山環境エコアクションポイント協会)

この度は、素晴らしい賞と共に、貴重な経験をさせて頂き、社会貢献支援財団の皆様並びに、推薦して頂きました、和歌山環境エコアクションポイント協会様、本当に有難う御座いました。

今年は新型コロナウイルスの影響で開催もギリギリまで迷われたとの事ですが、万全の対策をして頂いていたので安心して参加する事が出来ました。

私たち、NPO 法人レット症候群支援機構は、1万人～1.5万人の女の子に一人の確率で発症する進行性の不治の病、レット症候群という難病を支援している団体です。

症状としては生後6か月～1歳頃までは普通に成長しているかのように見えて、その後ハイハイやお座り、手を使っておもちゃで遊ぶ等の動作が徐々に出来なくなってしまいます。筋力が衰えてといったわけではなく、一度獲得したはずの動作ですが脳の神経伝達が上手くコントロールできなくなってしまう事によって後退してしまいます。また同時に、てんかんや、側弯症、息こらえ、睡眠障害等、様々な障がいを併発し、その都度対処療法を行い、療育を行い・・・見守るしかないのが現状です。

そこで私たちは、患者さん同士の交流をメインに活動するのではなく、治療法開発の研究を支援する活動をメインに考えて2011年にNPO 法人として設立致しました。これまでに多くの方々からご支援頂き、累計で1,000万円の研究費支援を行ってきました。

このような地道な活動を続けて、今では国内でレット症候群を研究対象としている多くの研究者さんともネットワークが構築されまして、毎年一回研究の進捗や今後の展望等をディスカッションする公開シンポジウムを開催し、患者家族やケアに関わる方、研究者の方々等に御参加頂いております。

10年目の節目となるこの年も、色々なイベントを考えていましたが、中止せざる負えない状況で、まともな広報活動が出来ていませんでした。その中でもこの榮譽ある賞をこの節目の年に、受賞出来ましたのは私たちの活動の大きな自信にもなりましたし、今後更なる活動を経てより多くの方に社会貢献できればと考えています。

代表理事 谷岡 哲次



▲シンポジウム開催



▲レット症候群の女の子



▲街頭募金活動



▲研究者さんと共に



▲研究費支援



▲広報 写真展開催

井口 彰



兵庫県

兵庫県加古郡稲美町の天満東小学校や稲美中学校の通学路で、毎日天候に関係なく集団登下校する子どもたちを、愛犬と共に見守る活動を40年間続けている。子どもたちからは「おはようおじさん」と親しみを込めて呼ばれている。

当時、小学生だった娘さんが登校する通学路の交通量の多さや道の狭さに不安を感じ、車の通りが多い交差点で立ち番（見守り）を始めた。今でこそ子どもたちの見守り活動は一般的だが、当時は子どもたちに関わる犯罪も報道も少なく、地域では理解されずに一部では誤解もあった。しかし、学校関係者や自治会などとの会話で少しずつ毎朝の立ち番の必要性を理解してもらった。子どもたちも慣れてきて挨拶もするようになった。

15年程前から、愛犬も一緒に立ち番を始めたところ、今まで以上に子どもたちの笑顔と元気なあいさつが返って来るようになった。愛犬の効果は抜群で、警察主催の交通安全教室等で引っ張りだこになり「交通安全啓発犬」の委託を受け、地域の交通安全、防犯広報にも役立っている。

(推薦者：永嶺 静昭)

この度は、社会貢献者表彰という荣誉ある賞をいただき、式典当日には安倍昭恵会長より直接いただいた折には緊張いたしました。これまでの地道な活動に対して評価いただきましたことは、私にとって一層の励みとなります。大変恐縮いたしますが、これまでの日々に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

私は、幼・小・中学生の登下校の見守りをし、41年目となります。登校時には、私が「おはよう！今日も元気にいってらっしゃい」と声をかけると同時に、私自身も子どもたちから元気をもらう毎日です。そして、下校時には、小学校正門前で、「さようなら」のあいさつを子どもたちと交わし、近所の子どもたちと一緒に下校します。

稲美町の「安全・安心・住みよい町づくり」スローガンのもと、校門を一步出ると、地域が守る、そんな思いから少しでも防犯、子どもたちの見守りとなればと願い、取り組んできました。私は、子どもが大好きです。そんな子どもたちが、安心して登下校できるよう、目配り、気配り、思いやりの精神で、小さなことは自分で正したり、道路の危険箇所改善要請をしたりもし、みなさんにご協力もいただきました。

授賞式では、世界中で活躍されております方々の紹介をスクリーンで拝見しますと、ボランティアとして以上の大変なご苦勞をされていることに感銘を受けました。また、表彰式のみならず記念撮影にも快く応じてくださった安倍昭恵会長との1枚の写真そしてコンサートを聴きながらの帝国ホテルの美味しい食事を頂き、身に余る光栄でした。末尾になりましたが、この度ご推薦いただきました永嶺様、審査委員の方々、社会貢献支援財団には、深甚なる謝意を申し上げます。

この度は、誠にありがとうございました。



▲稲美町ツデーマーチ交差点での安全誘導



▲自転車通行の誘導



▲集団下校児童たちを誘導中



▲集団下校児童を見守り



▲信号のない場所での横断誘導



▲入学式 ラビの活動中の装い

伊藤 美代子



宮城県

東日本大震災後、仮設住宅の集会所などで、未就学児を持つ母親たちのために託児をしながら、母親たちに息抜きの時間を提供する活動を石巻市と亘理町で実施した。その活動を続けながら、2012年に仙台市泉区の自宅を事務所とし「親のような愛情と気持を持って、大切な子どもを預かる」ことをモットーに「NPO 法人子育てアシスト・エフワン」を設立した。

母子や父子などの個人、行事開催時や災害時などの団体からの託児、病院の受診代行や付き添い、妊娠から出産までの家事支援、障がい児やひきもり児の託児、支援センター間の送迎などを「こんな支援があったらいいな」の声に耳を傾け15人の保育士とともにしている。

(推薦者：NPO 法人亘理いちごっこ 代表理事 馬場 照子)

このたびは社会貢献者表彰を頂き、身に余る光栄として感謝に堪えません。

仙台市で活動している当法人は、障がいを持つ児童・ひとり親世帯・ひきこもり・貧困家庭など社会的困窮状態にある家庭の子育てを、理由を問わずに一時預かりしたり、一般家庭も含む病児病後児の一時預かり、出産サポート・お泊り等の子育て支援を目的に2010年に設立した団体です。その後、東日本大震災が発生、地下鉄やライフラインが閉ざされた中で活動を再開、幸いにして事務局のある泉区は水道、電気が早くに復旧し、事務局でお子様の沐浴サポートを1日3組送迎付きで仙台市ガスが復旧するまでの10日間実施、30組の親子を支援。さらにその後は石巻市内の仮設集会所で子育てに関する支援を行い、2012年にNPO法人化し、石巻市内で支援している7チームと連携し2014年まで活動を続けました。

2015年4月より、亘理町で子育て支援を2017年3月まで行い、現在は仙台市で、お母さんからの様々な支援依頼内容を受け活動しております。当法人が設立から8年4か月の短い業歴の中で今回、特定非営利活動法人亘理いちごっこ様より推薦を受け、第54回公益財団法人社会貢献支援財団より表彰されたことは、今後も事業を継続していくうえで、自信にも繋がっております。

初めて体験する授賞式の雰囲気にも圧倒されながらも安倍昭恵会長との記念写真撮影の時、失礼とは思いましたが、はにかみながら目礼をいたしましたら、微笑みが返りました。温かさで胸がいっぱいになりました。受賞した全39団体の方々の素晴らしい活動は、私共の明日への励みになり、当日、表彰された個人・団体の方々にお会いできた事は、大変光栄に思います。

当法人も現在、支援依頼内容にまだまだ対応不足という課題もあり、それを見直しながら、子育てに悩んでいる家庭の更なる支援に努めて参ります。

そして、子育ての問題はコロナ禍の中、ステイホームや学校のお休み等で新しいス

トレスも発生し、また父親の子育て相談などの研鑽に努め、輪を和にするべく、仲間と共に広げて参ります。

この度はこのような貴重な機会をいただきましたことに、改めて感謝いたします。最後に貴財団のご発展を心よりご祈念申し上げます。有難うございました。



▲一般託児の様子



▲深めよう親子の絆 深めよう地域の絆 雪遊び大会



▲集団託児の様子

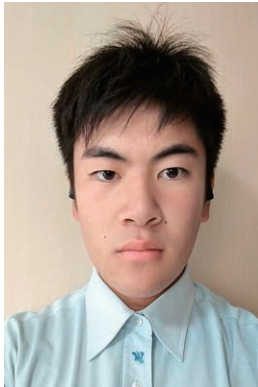


▲餅つき大会



▲石巻仮設住宅で餅つき大会集合写真

アイランダーサミット学生チーム



チームリーダー
佐藤 一樹

沖縄県

2019年10月のアイランダーサミット石垣の開催をきっかけに、石垣市役所が実施している人材育成プロジェクト「Chura★I（チュライ）」に参加している地元の沖縄県立八重山高等学校の生徒と、石垣市公営塾に通う、沖縄県立八重山商工高等学校・沖縄県立八重山農林高等学校の生徒等が、持続可能な島の発展と環境維持の為に、島特有の様々な課題に取り組んでいる。

カウアイ島・バリ島・サルディーニャ島が参加した同サミットで、学生らは、島共通の問題である、漂着ごみについて、ビーチクリーンを通じて回収したごみが、その後どのような経緯を辿るのか調査し、プレシャスプラスチックの利用について検討するなど、プレゼンテーションを通じて今後の課題と大きな成果を残した。また、次なるテーマとして、島の公共交通機関を使つての観光パンフレットの作成を行ったほか、環境共生型ツーリズムの研究にも取り組む予定である。

この度は社会貢献者表彰を受賞させて頂きありがとうございます。新型コロナの影響で残念ながら授賞式には参加できませんでしたが、プロジェクトメンバー一同歡喜しておりました。

この活動は元々インドネシアのバリ島にあるグリーンスクールとの交流から始まりました。グリーンスクールとは自然に関する知識を主軸に学び、実践する学校です。この交流を通して本活動の礎となる自然環境への意識が育まれました。そして私たちも自然を守る活動を行おうと、石垣島で開催されていたビーチクリーンに参加しました。ここで私たちは海を観光資源としている石垣島のビーチの本当の姿を目撃しました。ペットボトルや漁具、プラスチック製品などが山のように白い砂浜に打ち上がっており、それは見るも無残な姿でした。この状態を綺麗にするビーチクリーンはとても意義のあることだと思いました。しかしながら、十代の高校生が行う活動としてはあまりに過酷で面白くないものでした。現役の高校生は恋に勉強に忙しい時期なのです。

高校生が継続的にビーチクリーンを行っていくのは難しいという課題に直面しましたが、一方で流行の中心にいるのは私たち高校生だと気づき、ビーチクリーンを高校生に広めることができれば、もっと世の中に広められると考えました。そこで私たちはゲーム性を取り入れたビーチクリーンを考え出しました。チーム競技性を加えたり、おもしろい道具を使えたり、抽選でエコ商品があたるなどこのゲームは現在試行錯誤中ですが、実験に参加した高校生からは「楽しかった」「環境問題に関心が出てきた」「また参加したい」といった声が多数出てきています。

次にまた違う問題が出てきました。私たちが拾ったプラごみは埋め立てられ、雨風

でまた海に戻っていったり、島外のゴミ処理場に送られていくのです。つまりゴミを拾うだけでは問題の解決にはならないのです。そこでプラゴミの有効な処理方法について調べたのですが、現在有効な策はないことを知りました。しかし、このような実態をどうにかしたいと思った私たちはプレシャスプラスチックというオープンソースのシステムに出会いました。このシステムはプラゴミを機械で破碎し溶解させて新しい製品を作る装置でした。この装置でリサイクルを体験として学び、少しでもプラゴミの現状を広めていこうと考え実践しています。このプロジェクトのゴールは私たちの子どもたちに綺麗なビーチを残すことです。そのために石垣島の高校生でビーチクリーンを持続的に続けることと「プレシャスプラスチック」を運用し、そのノウハウを日本全国の小学校から大学までの行事などに広めていきたいと考えています。私たちがこの世からいなくなるまで、海が美しく綺麗であるために。

八重山農林高校3年 佐藤 一樹



▲アイランダーサミット分科会参加



▲アイランダーサミット前の合同 MTG



▲観光パンフレットお披露目



▲ビーチクリーン



▲ビーチクリーンの成果

ユース・エンディング・ハンガー



東京支部代表
及川 結加里



坂上 大河

東京都

ユース・エンディング・ハンガー (YEH) は、飢餓のない世界をつくるために活動する国際協力 NGO、ハンガー・フリー・ワールド (HFW) の青少年組織。「飢餓が若者の命を終わらすのではなく、若者が飢餓を終わらせよう」を合言葉に日本を含めたアジア、アフリカの5か国で行動を起こしている。日本の YEH の主な活動は、飢餓や食料問題についての啓発活動。

世界ではすべての人たちが十分に食べられるだけの食べ物は生産されているのに、9人に1人が飢餓に苦しみ、一方では多くの食料が捨てられている。こうした問題を多くの人に知ってもらうため、愛知、東京、山梨の大学生、また「伝えるボランティア」という高校生ボランティアの約80名が中心となって活

動をしている。食料問題を学び、より効果的に伝えるための工夫点を考えながら、啓発イベントを学生自身で企画する。企画書や PPT などのプレゼン資料を作成し、小学校で出張授業を行ったり、学内や HFW の事務所でワークショップを開催したりしている。

10月16日の「世界食料デー」が近づくころは活動が最も活発になる。さらに、年に1度は国内メンバーが一堂に会する機会として合同合宿を開催。勉強会や情報交換をしながら活動の創作を行う。また、2～3年に1度、他国の YEH メンバーとの交流や活動の方向性を話し合うグローバル・ユース・カンファレンス (GYC) も実施している。

2020年8月24日の社会貢献者表彰に参加させていただきましたユース・エンディング・ハンガーと申します。

この度はこのような名誉ある賞をいただき誠にありがとうございました。たくさんの表彰者の方々の活動を拝見させていただき、日本では多くの団体や個人がいろいろな角度から努力やサポートをしているのだと改めて感じました。

私たちは、学生が主体となって飢餓の現状を知ってもらうために啓発運動を行っている団体です。私たちユース・エンディング・ハンガーは東京、愛知、山梨、バンガラデシュ、ベナン、ブルキナファソ、ウガンダで活動を行っています。

団体の紹介を簡単にさせていただきます。文責を務めます及川は、現在ユース・エンディング・ハンガー東京支部に所属し、代表を務めております。東京支部は、メンバー不足のため一度活動を停止していましたが、私たち数名で立て直し活動を再開しました。山梨や愛知などの他の支部とは異なり、関東圏の様々な大学生のほか高校生も参加しており、多種多様な意見をシェアできる団体にまでなりました。

私自身、これまでの20年間、人の上に立つ経験がなく、当初はこの団体をどのようにまとめようか、また、「世界飢餓」をどのように広めていこうかなど多くの困難がありました。しかし、仲間から支えられ、SNS やホームページを通じてイベントの参加者が増えていき、また、団体に携わってくれる参加者も増えていきました。参加

された方からも「同じ世代の方が説明してくれたので、興味がわきました。」「ワークショップ型にすることでとても分かりやすく、楽しかったです。」などの感想をいただき、私たちの活動の励みになり、また大きな自信にもつながりました。この受賞に当たり、私たちを指導してくださったハンガー・フリー・ワールドの方々には深く感謝いたします。

公益財団法人社会貢献支援財団様には54回の歴史の栄えある表彰をいただきましたことを心よりお礼申し上げます。またコロナ禍の中、表彰式を開催していただきました会長のお心に感謝申し上げます。自分の人生の中でこのような晴れがましい表彰式に参加することはないだろうと思うほど素晴らしい時間を過ごさせていただきました。

活動を再開してまだまだ日が浅く、浅学寡聞の私たちですが、この感激を忘れずにたくさんの方々に飢餓の状況を知っていただけるよう、仲間とともに切磋琢磨し活動していく決意です。

この度は誠にありがとうございました。

東京支部 代表 及川 結加里



▲グローバル・ユース・カンファレンス



▲ワークショップの様子



▲外部イベントへのブース出展



▲学内でのプレゼンテーション（新入生歓迎）



▲低学年に飢餓問題を伝えている様子

動物介在活動 ぷらす



代表
伊東 郁乃

静岡県

静岡県御殿場市にあるハンセン病施設（国立駿河療養所・私立神山復生病院）に犬を連れて、入所者たちとのふれあい活動及び交流を続けている。2016年11月発足。連れて行く犬は、家庭で飼われている犬だが、飼育者はそれぞれ専門的な資格を持ち、行政ボランティアに長年参加していた犬、盲導犬の訓練施設からキャリアチェンジした犬、殺処分寸前であった犬もいる。活動時間は毎回約30分程度で、簡単な自己紹介のあとそれぞれ芸などを披露、入所者のみなさんとリハビリ体操などを行い、犬たちとの触れ合いタイムに入る。楽器を手にしながら季節にあった唱歌や童謡を2曲歌い終了となるが、毎回プログラムは工夫をしている。長年強制隔離され、過酷な人生を強いられてきた入所者のみなさんに楽しい時間を過ごしてもらおう。

訪問活動以外では、行政、国立ハンセン病資料館の協力を得ながら、各地の市役所、公共施設などでハンセン病企画展を開催している。勉強会を重ね学ぶうちに、多くの人々にハンセン病企画展を通じてハンセン病を知り、関心を持ってもらうことが必要と社会啓発活動に力を入れている。

（推薦者：大阪大学 CO デザインセンター教授・副センター長 池田光穂／社会福祉法人三島市社会福祉協議会）

ハンセン病施設に犬を連れてふれあい活動をする、各行政機関を巡回してハンセン病企画展を行う、というささやかな活動に対して、第54回社会貢献者表彰を賜り、誠にありがとうございました。すべてを手弁当で行う活動だけに心より感謝申し上げます。

ハンセン病は誤った国策により隣近所・学校・警察・行政等が加害者集団になってしまった悲しい歴史があります。二度と繰り返してはならないと啓発活動をしていますが、昨今のコロナ禍では重なることも多く、心を痛めております。

今これを読んでくださっている「あなた」は何歳ですか？20代？40代？60代？それ以上ですか？人生を振り返ると今までいろいろなことがあったと思います。しかしハンセン病の強制隔離によって現在入所している方々は50年、60年、70年～という長い年月をここで暮らしておられます。「あなた」が様々な経験に彩られてきたと同じ年月を閉じ込められてしまった、まさに人生被害なのです。特効薬があり隔離の必要はない治る病気であるのに、長きにわたって家族まで差別と偏見にさらされてきています。

しかしそうした中でも、しっかりと地に足をつけ生き抜いてきた方々がいらっしゃいます。30分程度ですが、せめて犬と共に温かい時間を過ごして頂けたらという願いで始めた活動です。魅力的な方々との出会いにより私たちは多くを学ばせて頂いています。そしてそれをもっともっと知って頂きたい、それをお伝えしていかなくてはならない、と捉えております。



私たちの活動は、施設のご理解・ご協力だけではなく、本当に多くの方々の支えで実現しております。また寿命が人間より短い犬たちの愛らしい姿が維持できるよう、何よりも最優先にケアと負担をかけないプログラムに細心の注意を払っています。お一人でも「来てほしい」という方がいる限り、続けたいと思っています。

開催する企画展では、当事者の方々の作品や思いも綴っております。ハンセン病のことを何もご存じない方がご覧になってもわかりやすい内容にしています。どこかで「ぶらす」のハンセン病企画展をみかけたら足を運んで頂きたいですし、また私たちの活動によって、施設に行こう、ハンセン病のことを知りたい、学校の勉強でとり入れてみたい、ということに通じたら幸いです。

最後に表彰式に出席して、実に多くの活動が世の中にあることを改めて知ることができました。素晴らしい活動の数々に驚き、とても学びと励みになりました。

代表 伊東 郁乃



▲集合写真

年度別表彰分野・受賞者数の実績

分野	年/回	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	小計
		昭46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	
人命救助等		93	203	156	157	213	197	235	255	230	183	1922
国際社会への貢献												0
青少年育成・スポーツの振興		14	21	33	101	111	95	97	81	75	76	704
社会福祉への貢献		62	58	82	149	140	200	149	114	102	119	1175
文化の振興					3	7	11	5	9	11	11	57
地域社会への貢献		14	18	12	14	26	19	20	15	12	14	164
運輸交通への貢献		23	15	16	24		43	66	57	55	52	351
その他		34	35	87	97	114	95	105	135	139	105	946
小計		240	350	386	545	611	660	677	666	624	560	5319
開催日		3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21	
式典会場		①ホテルニューオータニ					②笹川記念会館					

分野	年/回	11回	12回	13回	14回	15回	16回	17回	18回	19回	20回	小計
		昭56	57	58	59	60	61	62	63	平元	2	
人命救助等		195	208	177	198	274	193	106	127	89	98	1665
国際社会への貢献											19	19
青少年育成・スポーツの振興		81	93	89	78	92	117	22	24	26	26	648
社会福祉への貢献		95	112	124	109	104	103	38	38	46	57	826
文化の振興		16	13	17	20	19	12	9	7	13	8	134
地域社会への貢献		15	12	12	15	8	13		3	7	11	96
運輸交通への貢献		42	40	38	45	35	31	55	54	69	76	485
その他		96	95	104	94	86	56	57	48	39	10	685
小計		540	573	561	559	618	525	287	301	289	305	4558
開催日		11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9	
式典会場		②笹川記念会館										

分野	年/回	21回	22回	23回	24回	25回	26回	27回	28回		小計	受賞者合計
		平3	4	5	6	7	8	9	10			
人命救助等		101	82	34	15	47	21	27	16		343	3930
国際社会への貢献		13	17	14	4	8	5	5	6		72	91
青少年育成・スポーツの振興		40	54	44	29	22	25	28	32		274	1626
社会福祉への貢献		64	75	68	28	36	37	34	42		384	2385
文化の振興		11	15	10	3	8	10	10	12		79	270
地域社会への貢献		12	9	4	7	14	20	19	19		104	364
運輸交通への貢献		83	80	49	18	14	18	16	20		298	1134
その他		13	7	7	0	0	0	0	0		27	1658
小計		337	339	230	104	149	136	139	147		1581	11458
開催日		11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9			
式典会場		②笹川記念会館		③ホテル海洋			④東京全日空ホテル					

分野	年／回									小計	受賞者 合計
	29回 平11	30回 12	31回 13	32回 14	33回 15	34回 16	35回 17	36回 18			
第一部門 緊急時の功績	6	5	6	8	5	4	5	2		41	
第二部門 多年にわたる功労	14	15	11	12	13	11	11	18		105	
第三部門 特定分野の功績 (海の貢献賞)		4	7	8	8	11	9	9		56	
(国際協力)			2	1	3	3	4	2		15	
(ハッピーファミリー)		2	2	1	0	2	0	0		7	
(21世紀若者)		0	0	2	1	3	1	2		9	
		2	3	4	4	3	4	5		25	
こども読書推進賞					3	3	3	3		12	
小計	20	24	24	28	29	29	28	32		214	11672
開催日	11/10	11/22	10/29	11/19	11/4	11/15	11/16	11/20			
式典会場	④	①	④東京全日空ホテル								

※平成11年度より一般からの個人推薦を受付。

平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。

平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する。

平成15年度よりこども読書推進賞を新設。

分野	年／回										小計	受賞者 合計
	37回 平19	38回 20	39回 21	40回 22	41回 23	42回 24	43回 25	44回 26	45回 27			
人命救助の功績	9	13	11	11	8		3	9	0		64	
社会貢献の功績	33	35	34	34	39		36	35	47		293	
特定分野の功績 (海の貢献賞)	1	2	3	5	2		2	0	0		15	
海への貢献の功績								3	2		5	
こども読書推進賞 表彰式：6/26 会場：虎ノ門パストラル	1										1	
東日本大震災における 貢献者表彰 表彰式：5/1 帝国ホテル						128	12				140	
小計	44	50	48	50	49	128	53	47	49		518	12190
開催日	11/13	11/17	11/24	11/16	11/21	5/1	11/25	12/1	11/30			
式典会場	④ ANA インターコンチ ネンタルホテル					⑤帝国ホテル						
												12190

平成19年度より分野名を変更。こども読書推進賞は最終回。

平成24年度は東日本大震災における貢献者を表彰。

平成26年度より特定分野の功績(海の貢献賞)は海への貢献の功績に変更。

分野	年／回										小計	受賞者 合計
	46回 平28	47回 28	48回 29	49回 29	50回 30	51回 30	52回 令1	53回 1	54回 2			
人命救助の功績	9		11		11	8	4	3			46	46
社会貢献の功績	11	51	17	53	29	32	33	37	39		302	302
小計												348
開催日	7/1	11/28	7/21	11/27	7/6	11/26	7/22	11/25	8/24			
式典会場	⑤帝国ホテル											
												12538

平成28年度より年に2回式典を開催。

都道府県別受賞者内訳

県名	第53回 までの累計	第54回 受賞者	受賞者数
北海道	665		665
青森県	180		180
岩手県	216		216
宮城県	395	2	397
秋田県	125		125
山形県	156		156
福島県	179		179
茨城県	202		202
栃木県	150		150
群馬県	243	1	244
埼玉県	473	2	475
千葉県	403	1	404
東京都	1,188	4	1192
神奈川県	632	4	636
新潟県	263		263
富山県	144		144
石川県	143		143
福井県	205		205
山梨県	135		135
長野県	201		201
岐阜県	217		217
静岡県	315	2	317
愛知県	319		319
三重県	164		164
滋賀県	101		101

県名	第53回 までの累計	第54回 受賞者	受賞者数
京都府	214	2	216
大阪府	497	5	502
兵庫県	521	3	524
奈良県	113	1	114
和歌山県	144		144
鳥取県	94		94
島根県	111		111
岡山県	309	1	310
広島県	416	2	418
山口県	272	1	273
徳島県	177		177
香川県	196		196
愛媛県	150		150
高知県	75		75
福岡県	551	3	554
佐賀県	134		134
長崎県	268	1	269
熊本県	232	1	233
大分県	127		127
宮崎県	74		74
鹿児島県	142		142
沖縄県	166	3	169
その他	102		102
合計	12,499	39	12,538

※受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計

※県名は、受賞者居住地の都道府県名 その他は居住地が海外

※受賞者数は、こども読書推進賞受賞者、東日本大震災における貢献者表彰受賞者も含めての累計として
足した数。

役員・評議員一覧

会 長	安 倍 昭 恵	公益財団法人 社会貢献支援財団
副 会 長	内 館 牧 子	脚本家 東北大学相撲部総監督
理 事	浅 野 加寿子	放送評論家、プロデューサー NHK 会友
理 事	天 城 一	公益財団法人 社会貢献支援財団
理 事	犬 丸 徹 郎	ベルナルドジャパン株式会社 副会長
理 事	増 岡 聡一郎	株式会社 鉄鋼ビルディング 専務取締役 COO
理 事	屋 山 太 郎	政治評論家
監 事	篠 原 由 宏	篠原法律会計事務所、弁護士
監 事	中 村 元 彦	中村公認会計士事務所 所長
評 議 員	石 井 宏 治	株式会社 石井鐵工所 取締役社長
評 議 員	井 沢 元 彦	作家
評 議 員	ロバート キャンベル	国文学研究資料館 館長
評 議 員	久 米 信 行	久米繊維工業株式会社 取締役相談役
評 議 員	徳 永 洋 子	ファンドレイジング・ラボ 代表
評 議 員	永 嶋 久 子	株式会社 資生堂 元取締役

(五十音順)

公益財団法人 社会貢献支援財団

設 立：1971年5月1日
所 在 地：東京都港区西新橋1-18-6 クロスオフィス内幸町801
郵便番号：〒105-0003
T E L：03-3502-0910
F A X：03-3502-7190
U R L：<https://www.fesco.or.jp>

社会貢献者の記録

2021年3月15日

発行者：公益財団法人 社会貢献支援財団

印刷：ヨシダ印刷株式会社

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION